

イギリス中世の一頭韻詩：“JOSEPH OF ARIMATHIE”

——アーサー伝説の一環——

田 中 幸 穂

On an Alliterative Poem in ME : JOSEPH OF ARIMATHIE

—— As a Link of the Arthurian Legend ——

Sachiho TANAKA

ま え が き

現在までに刊行されている Early English Text Society の Publications を要約すると大體次の四組になる。

1. Arthur and other Romances
2. Works Illustrating English Dialects and the History of English Language, including a Series of Re-edition of Early English Dictionaries
3. Biblical Translation and Religious Treatises
4. Miscellaneous

以上四組の中の第一番目のものの中に次の五つのものがある。

1. “The History of the Holy Graal”, which tells of Joseph of Arimathea, and how he brought the Holy Vessel to England
2. “Merlin”
3. “Lancelot of the Lake”
4. “The Quest of the Holy Graal”
5. “Le mort Artus” or “morte Darthur”

この中の第一番目に属するもので、Walter W. Skeat の編した Joseph of Arimathea がある。(Original Series 44) このテキストの中には “Joseph of arimathie” (from the Vernon MS), The Prose “Lyfe of Joseph of Armathy”, “De Sancto Joseph ab Arimathia”, The Verse “Lyfe of Joseph of Arimathia”

がある。この中の後三つは最初の頭韻詩 Joseph of Arimathea の理解の補助に収録したものであるので、私は最初の一つを取扱うことにした。

1. アリマタヤのヨセフの歴史性と傳説性

知られる如く、アリマタヤのヨセフは新約聖書の共観福音書と第四福音書に出て来る者で、canon に依ると彼は Jerusalem から10哩位北方のアリマタヤ (Arimathia) に生れた金持で、善良で正義に富み、神の国を待ち望める男で、イエスの死後その屍體をピラトよりもらい受け、亜麻布で包み、岩の墓に納め、石を蓋に町重に葬つた人である。(この時ニコデモも没薬や沈香を携え来たとする。ヨハネ伝参照) Apocrypha (Nicodemus:) によると Joseph はその後 Jews に捕えられて投獄せられるが、不思議にキリストに救出される。即ち、キリストは獄中の彼に現れ、彼を自らの手で連れ出し、アリマタヤの町にかえす。

この Joseph が英国へ渡来したという伝説は Glastonbury で早くから固く信じられていたようである。此が更に伝説を生むに至り Britain にも Holy Bible 中に述べられた者が渡人かはいることを主張したい慾望から色々な物語が書かれ、又其を基にして全く荒唐無稽のものも出来たやうである。

このアリマタヤのヨセフがどういう形でアーサー伝説と関係があるかという Arthur の主宰する Round Table の騎士達の中で最も高潔であつた Galahad だけが所謂 Holy Grail

を実際に視ることが出来たのであるが、この Holy Grail を Britain に持つて来たのは Joseph of Arimathea であると信じられていたからである。実際私が読んでみた韻語詩の中で一回 Galahad の名が出て来る。

Go þou most to þi wyf gete þou most
nede

A child, Galahad schal be hoten þat
goodnesse schal reise

þe Aventurus of Brutayne to haunsen
and to holden (1.230-232)

(お前は妻の所へ行つて、ガラハドという大事な子供を生まねばならぬ。彼の徳はブリテンの驚くべき功業を高め、保つ基となるだらう。)

もう一つこの伝説と関係のあるのは、前に述べた The Verse "Lyfe of Joseph of Arimathia" の中に於てである。即ち、此によると、St. Joseph の shrine に凡ゆる人々が捧物をするようすゝめた後、著者は奇怪な walnut-tree に言及し其が hard by the place where kyng Arthur was Founde に成長し、又 weary-all-hill (Werral ---- 1.385) で3本の hawthorn-trees が成長するといつている。然し、この物語を全體を通じてみると斯る木1本即ち、Glastonbury-thorn が聖 Joseph の英国到着後彼がその hawthorn-wood の杖を大地に突き立てた地点に成長したことを物語っている。

2. 作 者

この "Joseph of Arimathie" は、Malory もその "Morte Darthur" (Book. XIII, ch. 10) の中で其に依つたと思はれるフランスの散文 "La Queste del Saint Graal" (AD.1220年代作) の一部を大體翻譯加筆したものである。作者は全く不明であるが、或る愛国心の強い僧侶ではなかつたかと想像される。Skeat によると此の詩は恐らくもは約800行から成つたものであるらしいが最初の100行近くが、紛失し、最後の709行が残っている。

3. 成 立

第二世紀の前後或は其より50年も早く基督教

宣教師が Britain に渡来し、(Tertullian は大体AD.200年迄にしか戻さない。)粗末な教会堂を Glastonbury に建て、以来、其処は宗教の中心地になつた。Brown の The History of English Bible によると、「Normans による英国征服と共に必然的にその征服した土地を取扱うための緊急な問題が起きた。それは、将来話される言葉はどんなものでなければならぬかという問題では全然なくて、征服者のか被征服者のかという問題であつた。ノルマン社会の社会的要求を輸入することにより、その強力な力の前で、王と宮廷により支配されていた英国語は自らの存立のため戦はねばなかつた。そして其は勇しく戦つたし、その強い性格は其の戦に役立つた。Norman-French が宮廷や学校や酒場の言葉になつた時、Saxon 語は、不撓不屈で百姓家や cottage に、又市場の取引や日常生活の日々の行動の中で、その生命を保つた。然しこの事が一方真実であると共に Latin Vulgate の聖書が英語に翻譯されることも少くなかつたやうである。四福音書の Anglo-Saxon Version は十二世紀の末になる迄書きつづけられた。大英博物館には十二世紀の終頃に確か書かれたと思はれる写しがある。英語のもつと古い形が征服以後永く使用されつづけられたということを示すやうな、その他の写しが Oxford や Cambridge、その他の所にある。尙亦1360年迄聖書の唯一の本が征服以来英語にそのまま翻譯されて来ていた。此は Psalter で1320年頃二つの形で現れた。最初のものは Kent 州の Chart Sutton の Vicar である William de Schorham によつて訳されたものである。それに次いで殆んど同じ時期に北方 Yorkshire の Saxon 方言に訳された詩篇がある。此は英語の註解を伴っている。彼のこの註解附の詩篇は、Anderby の敬愛な隠者、Margaret Kirkey によつて書かれたものと思はれる。そして其が書かれた後、その世紀間広く流布し、他の者に高く評価されるに至つたやうである。彼の著作は宗教改革迄此種運動の一環として精神的方面を担当したやうである」と言つている。この引用でも解るやうに英国の

宗教的熱心は古くから根強いものであり、此に加えるに当時の十字軍遠征という社会的大関心事とが重り合つたところに“Joseph of arimathie”は成立したものである。

次にこの詩の成立した時期を確定するために Skeat の言うところをきくと「rhyme の無い頭韻の metre で書かれた英語の詩は比較的少い。この詩は此に属するが、私は約23程知っているが、Hales と Furnivall により編まれた Bishop Percy's MSの第三巻の冒頭に書いた私の頭韻詩の論文の中に此等23詩のリストを載せて置いた。我々が現在扱つているこの詩は、そこでは21番目に位置取り、その上充分に書き表されてもいないが、その頃私は其に就いて多くを知らず、従つて其に正しい位置を与えることが出来なかつた。然しこの詩は年代順から言えば、そのリストの中で非常に早くなければならず、確かに第五番目以下ではなく、多分第三番目であると思う。此事はこの詩にその主要な価値を与えるものである。其は明かに征服以後に存在する頭韻詩の最古品の中の一つである。このことは容易にその言葉が William of Palerne に似ていることによつて解るのである。そして私は其を Piers the Plowman よりも早く置くべきだつた。其はそれよりも遅くはまずあり得ないと思う。というのは、其はその詩の最も早い版の最も早い写しと共に同じ MS の中に見出されるからである。我々は安心して、其を A.D. 1360年より遅くではなく位置付けることが出来る。即ち、私はむしろ其を大体1350年にしたい。そのわけはその metre が William of Palerne より rugged であり、より初期の性格を持つているからである。そして私は此処では次のやうに述べることを中止するかも知れない。即ち、頭韻詩の進歩の法則は、1. loose な mould にできている line から strict な mould の line に移行してゆくものである。2. 二つの頭韻文字を持つた line から三つの頭韻文字をもつた line へ、そして、非常に後期の例では四つの頭韻文字を持つた line へと移るものである。3. 不規則な歩格を持つた line から、極端な規則

正しさがふさはしい冒頭の音の繰返を何かしら無理な単調なものにするやうな line に移行してゆくものである、ということである。勿論或る作家達は他の者に較べ、このことに不注意だつたが、然し、此の原理は確かに我々を或る点まで導きはする。即ち、原文中 lines 2--11 で二つの文字が斯くも屢々使用されるという事実は決定的に antiquity の印である。又六番目の line では同じ文字をもつて始る三つの語があるし、1 と 9 行に於ては v は f に対応し、1 と 12 行では我々は四つの rime-letters の普通でない number を持つている。（次行参照）

.... sire," he seis "and sonenday is nouwe."

þenne alle lauhwhen an heiþ þat herden his wordes,

"Hit is two and fourti winter", þei seiþen "trewely forsoþe,

Siþen þou souþtest þis put and to prison eodest!"

"Now I þonke my lord," seide Ioseph "þat lente me of his grace;

me þinkeþ but þreo niht al þis ilke þrowe."

þenne Ioseph askes fontston & is I-folwed blyue;

þei folewen him and his wyf & with him ful mouye.

Siþen com vaspasians and was furst sped, In þe nome of þe fader Ioseph him folewede,

And hedde I-turned to þe feyþ fifti with him-seluen.

Siþen he fette his fader with a ferde and a-þeyn fondet,

þer þei bosked hem out þat hudden hem in huirenes,

Made hem to huppe half an hundred foote,

forte seche boþem þer þei non seiþen. þus þei ladden þe lyf and lengede

longe,
 þat luyte liked his leyk þer as he
 lengede.
 Feole flowen for fert out of heore cuþþe
 into Augrippus lond was heroudes eir,
 þere monye lenginde weore for-let of
 heore. oune (1. I. --- 20)

4. 内 容 (梗 概)

作者の項でも述べたやうに最初の 100 行程は紛失しているが、Skeat によるとそこは大体次のやうなものであらうという。即ち、イエスが葬られてから、アリマタヤのヨセフはユダヤ人達に捕えられ、窓の一つも無い土牢に入れられたが彼はそこに四十二年居てやつと Vespasian により救出される。(此が詩の本文から紛失したと推定される部分であるが、このことは新約聖書の何れの福音書にもなく、又 Apocrypha (Nicodemus;) によつても、ヨセフはキリスト自身の手により助けられ、アリマタヤにかえされることになつていたので、此の部分も創作の部に属する。) 以下に本文の物語の荒筋をテキストに従つて述べてみる。

Joseph は 救出されてから、Vespasian に在獄の期間がほんの三日間に思えたと告げる。先づ己自身がバプテスマを受け、次に Vespasian と 50 人の者に洗礼をさづける。その後 Vespasian は Joseph を投獄したユダヤ人達に仇をかえす。その後、或る声が Joseph に命じて、「お前は妻と息子とを連れて Jerusalem を離れて福音を宣べ伝えよ。一度出た処に再びかえつてはならぬ」と言う。翌朝、彼は命ぜられた通り用意を整えて、受洗した 50 人の先頭に立つて旅発つ。先づ Betanye に到着。或る者が宿を心配するのをなだめて言う。「我等を導き給う神は必ず守り給うであらう」と。すると直ぐ其の場所に彼等が今迄見たこともないやうな宿を見出す。翌朝も用意を整えて出発する。そして Damascus の土地にあつてその王の所有する Argos という美しい花々の咲き乱れた森にやつて来る。

その時、今度は Jesus Christ 自身が Joseph に話しかける。「Joseph よ、材木に印を付けて箱を拵えよ。お前が受けたその血を盛るように。最後の審判が来る時、お前は用意が整つて居り、正しくあるだらう。そしてお前もお前の息子も何の危害も加えられぬであらう。Joseph よ、世界中を歩いて私の言葉(福音)を驕れる人々に宣べ伝えよ。必ず人々は聴くだらう。彼等はお前の話すのを脅すかも知れぬが何もおそれることはないから」Joseph が答えていうのに「主よ。私は僧侶でも何でもありません。何も知らぬ私はどうすればよいでしょうか」唯口を上下に開くだけでよい。そうすれば皆直ぐお前の口舌に帰するだらう。」

一行はやがて Sarras と呼ばれる町に到着する。即ち、Abraham の妻サラから生れた子孫が住んでいる土地である。Joseph はどこを見ても寺院以外建物が無いので、その一つに入つて行く。みるとこの土地の王がその中に坐つて恐れおのゝいている。Joseph はこの王を先づ神に還そうと希望した。王は Egypt と戦つて敗北し、何時も傷つけられ、更に敵と戦うためには家臣の忠言を聴かねばならぬので会議を開かうとしているが、彼等はそれを拒みつづけている。Joseph が言う、「王よ、お顔色が悪いが、何か御心配事でも、御不満でもおありですか。若しあなたが私の言うことに耳を傾けるなら、私は約束を致しますが、確かに創造者なる神があなたをお助け下さるでしょう。その神は十字架上に死し、それ程の価を費して我々を贖つたのです。私は彼の数多い事蹟を語るには値しないものですが」ここで王と Joseph の問答となり、Joseph は言葉を尽して福音の事実を解き明かす。然し王はなかなか聞き容れず、殊に incarnation の事実に関し強疑を懐いて言う。“Hou scholde a child come for without flescly dedes, Birtwene wommon and mon? my wit not leeue.” (1.107-108) (どうして男と女の交りなしに子供が生れるか。わしの智慧では到底信じられぬ。) 更に Joseph は trinity の秘義を詳しく説明する。然し王は “þe lengore I here, þe lesse

reson I seo in þat þat þou rikenest.” (1.137-138) (私は聞けば聞く程お前の言う理屈が解らなくなる。)という。そこで王はおかゝえの clerk を呼出し Joseph と議論させる。Joseph は聖書を用いてほんの三語内に彼をやりこめて了う。この時王は Joseph が素足の質素な身なりなので、更めて名前をきくので Joseph は自分の名前を名乗る。王は「どうもお前の言うことは不可解至極だから、明日もう一度此処で会つてくれ、お前達には充分の宿と食物を提供するし、それにゆつくり休めば休む程、我々の聴く力も増えるだらうから、(“Whon vre leysen is more vre lustynge is better”)」という、この時王は Joseph の息子 Joseph を見附ける。彼等は王の取計らいで町の美しい古い宮殿に泊る。

ここで著者は Joseph のことを離れて、王に話題を移すと書いている。(“Now we leuen Joseph and of þe king carpen”) さて王が夜、床に就いて居ると三つの心配事にとりつかれた。一つは、彼と相容れぬ部下の者達の強情、その二は、Joseph の熱心に説いて聞かす福音の物語、三は、神がどうして乙女マリヤに宿つたかということ。ところが王はその時二つの幻をみる。一つは部屋の床から三本の木が生え、その一本は黒ずんでいる。(Christ を意味する。)よくみると各々の木には三色の文字が画かれている。即ち、黄金、銀、青、此等は、神の創造、救済、聖化を教えているものであつた。王が見ている中に其等の木は一本の木に合して行つた。王も、呼び集められた家臣達も、余りの驚きに気絶しかけた。それから王は、板で作つた新しい部屋の壁を見ていると、固く閉したドアをぬけて一人の子供がすーとやつて来るのを見た。暫くその子供は留つていたが、又元通り消えて行つた。その時、王は或る声を聞いた。「王よ、今此処で起つたことに何も驚くことはない。そのやうに神は汚点なく乙女に宿つたのだ。(“King, haue þou no ferli of þat is heere formed, for so god with-outen wem wende in a Mayden.”) (1.210-211)」

ここで著者は、王のことを離れて Joseph に

就いて語ると記して語を進めて行く。(“Now we leuen þe king and of Joseph carpen(1.212)”) Joseph は神に祈を捧げる。「おゝ、主よ。どうしても理解し得ないこの王をどうすればよいでしょうか。今、此処で彼を改心させなかつたら、彼は以後決して改心しないでしょう。イエスよ。汝はモーゼを通してイスラエルの民に語り給い。彼等に信仰をすゝめ、異教の神々では何の役にも立たぬことをすゝめられ、又ライオンの沢山居る獄中に Daniel を無傷に守り、Magdalene のマリヤをやさしくその罪より許し、又私の祈が叶えられると御約束なされた主よ。どうか、私の祈を容け入れて下さい」その時、一声あり、次の如く言う。

“Ioseph, haue þou no care þe kyng schal sone torne:

Go þou most to þi wyf gete þou most nede
A child, Galahad schal be hoten þat
goodnesse schal reise

þe Auenturus of Brutayne to haunsen and
to holden.” (1.223-232)

(ヨセフ、心配することはない。王は直ぐ改心する。お前は妻の所へ行つて、ガラハドという大事な子供を生まねばならぬ。

彼の徳はブリテンの驚くべき功業を高め、保つ基となるだらう。)

そこで Joseph は床に就く。翌朝、自分が先に起きて部下の者共を起すと、空が俄に曇り、物凄しい雷が鳴り、大地が揺れ始め、皆の者は恐れおののく。Joseph は木箱を想いだし、そこに行つて Jesus Christ に祈りを捧げた。殊に息子の Josaphe のことを祈るのだつた。すると Josaphe は十字架上のキリストを見た。又五人の天使が彼の上に立ちふさがり、火のやうに赤く輝いているのをみた。一人は、奇妙な色の十字架を手に携げて居り、二人目は、三本の血の附いた釘を手に持つており、三人目は、イエスが被つていた茨の冠を持つて居り、四人目は、イエスを突き刺した槍を持つて居り、五人目はイエスが包まれていた血の附いた布切を持つていた。その時 Josaphe は畏れの余り弊れるが、

再びキリストは Josaphe に起き上るよう命じて起き上らせる。次に彼は Jesus Christ が十字架上に張り付けになるのをみる。その時使用される十字架も、釘も、槍も、天使達の持つていたものだ。真赤な血が流れ滴つている。彼はずっとその苦痛の様を見ていた。余り永く見ているので、父の Joseph が詰問すると息子の Josaphe が言うのに「あゝ、お父さん、今私に触れないで下さい。今私には身に余る靈的恩寵が充ち溢れて居りますから」そこで二人は喜に充ち溢れてその木箱に見入る。二人は Jesus Christ と白い布を持つた二人の天使、cruetを持つた二人、更に二人が宝石を鑲めたガラス壺を持つて来るのをみた。更に二人が十字架と僧帽を持ち来り、間もなく他の二人が着物を持つて来、又 Gabriel が美しい椅子を持つて現れるのをみた。

彼等はまた美しい布に覆はれた祭壇を見た。その一方の端には槍と釘があり、もう一方の端には血の入った皿があつた。Jesus は Josaphe に美しい着物を着せ、両方の手で以て彼を聖別するというのに「お前が行くどの町でも、お前を為したと同じ膏藥で人々を聖別し、キリストに還るようすゝめねばならぬ、今お前を靈の救済者として任命するが、若しお前の誤謬により、誰かが私の国から落ちるようなことがあれば、最後の審判の日、お前は手厳しく非難されよう。お前に言うが、お前の父 Joseph は肉体的に人々の世話をするが、今やお前は靈的に彼等の世話をせねばならぬ。さあ、王を改心させるために宮廷に向え」Joseph 等は王宮に向う。王は二人を論駁してやらうと最優秀の clerk を用意しているが、相互の大論戦の末にこの clerk が反駁しようとおら立ち上ると不思議に舌がかなはなくなる。無理強いに声を出そうとすると今度は両眼球が飛び出して了つた。王も家臣達も遠てふためいて二人を殺そうとしたが clerk を元通りにしてやるということでやつと和解する。そこで二人は偶像の無力を実際のもに当つて証し、王の心を改心の方向へ向ける。王は Josaphe の予言——Babylon の王、Tholomer が攻め来ること——を不安顔に尋ねるので、Josaphe が

語り始めようとする、丁度そこへ使者がやつて来て、Tholomer の軍隊がすっかり王の国を侵略して了つたと告げる。

王は軍隊を用意すべく命令を下し、早朝 Car-boy の城で落合うよう指令した。そこは Sarras からも 50 哩、敵陣からも 50 哩だつた。出陣前に Joseph は王 Evalak に王の卑しい前歴を語るのだつた。そして言うのに「あなたが今度かえる時にはあなたは私の説明を聴く充分の用意が出来ているのを本当に知るでしょう」といふ、Evalak の楯を取り、その真中に赤布で十字架を像り、若し危険が最高潮に達した時には、此の十字架を見てキリストに祈るようにとすゝめた。そのわけは実際にその楯の十字架の像を見得るものはなく、従つてその日は危険が迫つても、その危険は過ぎ去るから。

両軍は戦い、Evalak の兵は惨敗し、452 人は逃げた。王は水際に行つて身体を休めていたが、その時、一人の使者が女王からの手紙を彼に届けた。王が読んでみると、こう書いてある。今は直ぐ引上げること、そうでないと Tholomer の部下が彼を捕えるだらうと。王は一体誰がこの事を女王に知らせたのかと訝つたが、使者のいうのに宮殿に居る二人の基督教徒ではないかと思うと告げた。女王の手紙は Josaphe の忠告によるものであつた。王は直ぐ命令を出して、より多くの兵を整えるように手配した。かくしてその日は暮れ、翌日になつた。王は新しい兵 1400 人を集めた。ところが王は直ぐ側の森に真新しく武装した 500 人の騎士を見附けた。それは自分の妻(妃)の弟で Seraphe と呼ばれる年若い伯爵だつた。今迄も素晴らしい行動でその武勇は知れていた。その一隊が加勢してくれることになつたが、その際の Seraphe の兵士達への訓話は面白い。

“holdes ou stille,

And þenkes ou, goode men þe gref is
oure childre;

what wol bi-falle þer-of and we ben
confoundet.

Botere hit were douhtilyche to dizaen on

or oune,

þen wiþ schendschupe to schone and
vs a-bak drawe.” (1,492-496)

(悲しむのを止めよ。そして我々の子供達の悲しみのことを考えよ。若し我々が恐れて了えばどんなことが起るであらう。

我々は恥辱を受けて引退るよりもむしろ己が手で勇しく戦つて死ぬ方を潔よしとするものだ。)

その時彼等は既に敵陣に一太刀の間隔もない程に近附いていた。Seraphe は誇らしげにやつて来る男を見るや、その pole-axe を打ち降して直ちどころに打ちのめした。彼は一番厚い部分で自分の武器を試してみたのだつたが、その頭脳は打ち碎かれて酷く傷附いた。この戦は実に激しいもので、又ここの本文の描写は実にすぐれているので暫く引用してみる。Seraphe の活躍ぶりである。

Beer bale in his hond bed hit a-boute.

He hedde an hache vpon heiþ wiþ a
gret halue,

Huld hit harde wiþ teis. in his two
hondes;

So he frusschede hem with and fondede
his strengþe,

þat luyte miþte faren him fro and to
fluiþt founden.

þere weore stedes to struien stoures to
medlen,

Meeten miþtful men mellen þorw scheldes,
Harde hauberkes to borsten and þe brest
þurleden.

Schon schene vpon schaft schalkene blode.
þo þat houen vpon hors heowen on
helses.

þo þat hulden hem on fote hakken
þorw scholdres.

mony swouþninge lay þorw schindringe
of scharpe,

And starf aftur þe deþ in a schort while.

þer weoren hedes vn-huled helmes

vphaumset;

harde scheldes to-clouen on quarters
fellen,

slen hors and mon holliche at enes.(1,502-
517)

(彼の手が死を握つていて、其を彼は周囲にばらまくやうにみえた。彼は巨大な、柄のついた斧を高く振り上げ、凄いで打降すのだつた。彼は其を両方の手に紐で固く括りつけていた。そんなにして彼は斧を打ち降すので、殆んど彼の手から逃れるものはなかつた。俊馬は弊れ、戦は入り乱れ、荒武者は荒武者に立ち向い、楯は打ち碎かれ、堅い鎖子鎧も突きぬけて胸の奥迄突き刺さつた。兵士の血が穂先にきらきら輝き、馬で馳け廻つていた者も兎越しに伐り倒された。徒歩で逃げ廻つていた者は肩越しに切り殺され、大勢の者が鋭い刀で切られて唸りながら転る。時の間もなく彼等は息を引取る。裸の首が転り、兎は上向きに投げ飛ばされ、堅い楯も真二つに碎けてあつちこつちに横たはつている。彼等は皆殺しにされた。馬も兵士達も。)

斯くの如く伯爵 Seraphe は奇功をたてるが怒り狂つた Tholomer の軍との次の戦で、Seraphe は気絶し、王 Evalak も酷く傷付き捕えられ、近くの森に連れて行かれるがその時王 Evalak は楯の覆を取つてその上に画かれてある十字架を見詰めて祈つた。すると一人の子供が十字架上で血を流して磔られているのを見、自分も神の姿に似た者になるよう歎願した。すると一人の白装束の騎士が彼を助けにやつて来た。甲冑も馬も白百合のやうに純白で、その楯の上に印した赤の十字架も非常に美しく見えた。この騎士は Tholomer を惨殺し、Seraphe を癒し、Tholomer の馬に Evalak を乗せ、彼を援けて完勝を得しめる。そしてこの騎士は何処へともなく消え去る。そして二人は直ぐ宮廷にかえりたいと思ひ、又不思議な基督教徒の二人に会いたいと思つた。

ここで再び作者は話題を王から Joseph にかえて語り始める。(Now we leuen þe kyng

and of Joseph carpen)

Josephは女王の居る宮廷に留つていたのだった。女王が尋ねるのに「あなたは私の主人についてどうお考えですか。あなたが前に仰言つたことは確実に為されるとお思いですか」Josephが言うのに「そうです。神の大能により王は必ず勝利をしめ、神の限りない恩寵により、その傷も癒されます」「それでは私も主人が帰つて来たら信仰をすゝめましょう」と女王は言つてJosephの言う通りのCredoを暗誦してから、自分が信仰に入つた経緯を語り始める。

「私、あなたに本当のことを申し上げます。どうして私がクリス教信者になつたかが、何時そんなつたかを。私の母がまだ生きていた時のこと、母は永い間、悪い病に取憑れており、色々の場所へ行つてみましたが癒されなかつたのです。家の近くに一人の hermit が住んでいたので、或る日のこと、そこへ二人で行つてみました。母はこの隠者に癒して頂くよう頼みました。するとその人が言うのに「私はあなたと同じく罪深い者で、あなたを癒すことは出来ません」というのです。母は“あなたが希望を托している方に祈つても無駄ですか”と問いました。すると彼は“若しあなたがJesusを信ずれば、私は約束しますが、此処を去られる前にあなたはよくなりますよ”というのです。そこで彼は母を膝まづかせて、聖書を開き、その中の福音書を一章読み、母に立ち上るよう命じました。すると母はたちどころにその病から癒されたのです。それから母が言うのに、“いとしいわが娘よ、お前は私のやうになりたくないか。彼を信じないか”。そこで私は熱い涙を流して泣き、頬を濡しました。(and I wepte water warm and wette my wonges, 1.647)そこで私は母に言いました。“あの方の頬髭は灰色だし、そんな老ぼれを信ずるわけにはまいりません。”私はその隠者を指したと思つたのでした。ところが母は全く別の方、イエス、クリストを指したのでした。その時、その hermit が言うのに“お嬢さん、その方は、唯今あなたのお母さんが癒えたやうに、どんな方でも癒すことができ、又どなた

よりも立派な方ですよ”“そこで私は“ではその方が私の家に居る私の兄のやうに立派ならその方を信じましょう”といふました。すると“そうです、お嬢さん、あなたが此処を去られる前に御自身でその方を直接見られる程、大いなる恩寵が降りますよ”その時、イエス、クリストが非常にはつきり御自身で現れました。一目見たきり、私達はそれ以上見得ませんでした。そうしていると、一塵の風と、何ともいぬぬ句があたりたちこめ、大変いゝ心持になつてその時どんなことをしたか忘れてしまいました。彼は神のテーブルを用意し、聖書を持つて来て、私と母とが楽しく其を受けるようにしてくれました。こうして私はクリス教に入信したのです。」Josephが話を聞き終つて女王に問うのに「それでは何故あなたは御主人をそんなにも永くあのやうな生活を透らせて置くのですか」すると女王は「そうなのです。でも私にはどうしようもないのです。主人は非常に頑固で、神が恵を沢山下さる時以外は信心深くないのです。」

さて王は Sarras にかえる。大勢の者が彼に従つていた。彼は家に帰り着くや、Joseph と Josaphe の二人を名指し呼求め、自分の床の両脇に侍らせていうのだつた。「あゝ、Joseph、お前の言つたことは真実だ。お前が最初に告げた通り、お前の信ずる創造者は讚美さるべきだ！」すると、Josaphe が「それは誰か」と尋ねた。Joseph は直ぐ答えた。「汝を七人の騎士の運命から守つた者のことだ。」——Josephは神の大能の模様を彼等に詳かに語つた。その事は彼等には不思議でならなかつた。その時、酷く負傷した者が一人帰つて来た。彼は片腕を切り離され、それを片方の手に携げていた。そこで Joseph は王の楯に祈り、その男を膝まづかせた。するとその腕はたちどころに元通りになつた。そこで、Seraphe は真先にバプテスマを受け、名を Naciens と変えた。彼はその日受洗した者の中で最初の者であつた。彼が受洗する時、他の者は見ていたが、彼はその際まるで炎の如く輝くやうに見えた。彼等はまた聖霊が彼の上に降りるのを見た。そこで彼は以前全然知らなかつた

やうなことを語り始めた。次にその負傷した腕の癒された男が進み出て、父なる神の名により、洗礼を受け、彼は Cloomas と呼ばれた。次に王 Evalak がバプテスマを願い出た。Joseph は父なる神の名により彼を Mordreyns (a late man) と名附けた。それから次々と Joseph の所へ兵士共が来たので、彼は黄金の水盤を両手で持上げ、父と子と聖霊の御名により、次々に聖水を灑ぎ、正午迄に受洗した者は五千人以上になった。

最後の部分で Josaphe はこう言っている。父 Joseph は留つてそこに住むべきで、自分と Naciens とは知らぬ土地に行き、人々を教化し、彼等の誤解を論駁すべきだと。然し或る王が、Josaphe を獄に投じたので彼は最後に助け出される迄酷い悲しみの中に過ぎねばならなかつた。ところが王 Mordreyns がその偉大な力を持ち来り、彼等を無事救出する。一人残らず。そこで Josaphe と彼の一隊はその Holy Grail を二人の者に安全に守るよう任して、彼等はその町を去るので、Grail は後に残るのである。

「斯ういうふうに Evalak の初期の物語の最も興呼深い部分が此処でぼつんと切れているのは」と Skeat は説明している。「多分、英語版の著者が Evalak や Seraphe の受洗のことを物語り、Holy Grail を安全に残したので、ここで故意に筆を断つたものと思はれる。Vernon MS. の写しがこの最後の所で不完全だということを示すようなものは何も見当らない。」

5. イ デ ー

我々現代人は、或る作品を読む時、その作品の全体としての傾き、即ち、中心的思想を把握したがるのであるが、近代の作品ならともかく、古くからの伝説を織り込み、その都度々々変えられた内容を持つ中世ロマンス詩のやうな場合には、此の操作は少々困難であると思う。然し此もその作品の成立した時代とその作者が詳かにされれば、或る程度まで可能ではある。上に扱つた作品の著者が何者であつたかは全く不明なので、この方面からの追求は不可能であるが、

然し、この作品を読んだ感じからいうと作者は次々に不思議な出来事を語るにより神の栄光を語らうとしているように思はれる。

此が最初作られたと推定される時代をみると、1147年に始つた第二回目の十字軍は、その後、回を重ねるに従つて不成功に終り、再び各教会には Knights Templars 出発の命令が下つていた。聖地は侵かされてはならぬし、どうかして蕃賊から奪回しなければならなかつた。しかるに十字軍はいよいよ思はぬ困難に遭遇し、騎士達の士気も鈍つたので、ここに騎士達の士気を興揚し、宗教的栄光を求めることを奨励する作品が生れたものと思う。このためには前にも言つたやうに Holy Scriptures の中の人物が Britain にも居たことを記すのも一つの思附だつたと思はれる。そこであの偉大な王 Arthur の埋められた Glastonbury に主人公を上陸させて英国に花を持たせんとしたものではあるまいか。

私は此を読んで思うのだが、此の中に出て来る wonders や miracles は何といつても当時の人間の頭脳の要求したものであらう。彼等は Crusade の宗教的感激から中半、理性を失つていたのであらう。だから此を読むことにより、当時の人々は Sarras の侵される有様をまざまざと見、又次々に示される十字架のクリストの不思議な威力に打たれて東方への興奮と宗教的熱情に燃えたことであらう。斯くすることにより当時の文学の用は充分果し得たものと思はれる。

だから我々はこの作品の中に全体としての統一あるイデーを見るというよりも、当時の作家達が如何に想像力を働かせて、或るイデーから他のイデーへと次々に移つて行つたかを見ることに興味をおぼえる。

6. 様 式 (方言と語法)

i. 方言. 此の詩の書かれている方言のことを先に述べると Skeat は次のやうに言っている。「alliterative metre の最上の例は Northern & Western dialects の中に見出されるという私の論文中の注意は、southern, scribe によるも

のと思はれる詩の中の southern form であるこの詩の場合も真理である。然し、私が此処で更に注意して置き度いことは、混交した方言で書かれた作品は最も注意深く取扱はれねばならぬということである。方言の form の混交は scribe によるものだとするのが普通であるが、然しこのことは必ずしもそうとは限らぬ。斯る結果を説明する三つの解決法とそうでない唯一の場合とがある。その三つの解決法とは、即ち、こうである。①著者が自分の国のでない或る他所の方言で書こうとした場合。②或は混合した方言で話し、書いた場合。③又著者は一方言で書いたが、scribe が後に、自分がよりよく親んでいるもう一つの方言の形に、著者の用いた形の多くを変えた場合。勿論この解決法の中、第三のものは一般的に真理であるが、然し此は普遍的に採用されるとは限らぬ。というのは、稀ではあるが他の学説の例も尙實際には発見されるからである。第一の説はあの Lancelot of the Laik の場合真理であるところのものであり、又 Scottish author の詩の幾つかにとつて真理であるところのものである。第二の説は Piers the Plowman に対して真理であり、その中の少くとも 30 の MSS. は混合した方言で書かれて居り、そのことはその著者に由来したことに違いない。そして、Joseph of Arimathie の場合には、第三の説(普通の説)が適用される。そのわけは、scribe の Southernizing Tendencies はよく知られたことであり、scribe が写した教知れぬ他の断片から解るのである。又一方、この中に発見される北方の形はオリヂナルなものでなくてはならず、一般に北方、或は西方方言である頭韻詩によく知られた事実によつても解る。私が信ずるのに、この Joseph of Arimathie の詩は、もとは West-Midland 方言であつたが、その forms が屢 southern scribe に依り変えられたものであると思う。それ故 scribe がそのまま残したと思はれる non-southern forms に注意することは愈々興味深いことである。」

ii. 語法。(紙数の都合上省略。尙この語法の主なるものに就いては、昭和二十七年十一月八

日東北英語英文学会にて発表。)

7. 文学的價值

文学的価値も厳密に言えば、万物と同じく変遷する。ただ文学の場合、言い得ることは、その作者の意図することが、旨く表出されているかどうかには価値の規準は置かれると見るべきだらう。

この詩の主題は Sarras の王 Evalak の楯の挿話と Arimathia の Joseph の冒険とであるが、詩人はその目的のために言葉をうまく用いているようにみえる。例えば、501行 (Breek braynes a-brod brusede his wepne) や 647行の (And I wepte water warm and wette my wonges,) 等の如く、調子のよい頭韻の重る行の多くは実に簡潔で感動的である。W.P.Ker も言うように頭韻詩は、殊に戦場描写に適當であつて、この詩の中で battle scene のリアリスチックな筆致は、現代のリアリズム作品の或るものにも劣らぬ力強さを示している。前に挙げた 1.502-517 は言うにおよばず、その他次の如きすぐれたものがある。(括弧内は試訳)

Al to-hurles þe helm and þe hed vnder
(1.533)

(quite hurls in twain the helmet and the head under)

wiþe þe deþ in his hals downward he duppes (1.534)

(with the death in his neck downwards he dips)

maden þer a siker werk and slown hem vp clene (1.605)

(maden there a secure work of defence and slew them so cleanly)

(この小紹介は昭和二十六年文部省総合科学研究費による研究擔當分の一部である。)

— 参考書 —

- 厨川文夫：中世の英文學と英語
テヌ著：英國文學史(第1巻)
平岡譯

New Testament.

Authorized Version of Anglia, Zeitschrift für
englische Philologie, 40 Band.

Brown: The Short History of English Bible.

Cowper's Apocryphal Gospel.

Compton's pictured Encyclopidia.

Dummelow: The One Volume Bible Commentary.

Greene R: The Short History of English People.

Ker W.P.: Medieval English Literature.

Skeat, W.W.: EETS, Joseph of Arimathie.
(Original Series 44.)

Skeat W. W.: The Concise Middle English
Dictionary.

ABSTRACT

Among EETS publications I treated the alliterative poem of JOSEPH OF ARIMATHIE, which tells us a course of the history of the Holy Grail closely related to the Arthurian Legend. The present Publication (original series, 44, edited by W. W. Skeat) contains the following four ---- “JOSEPH OF ARIMATHIE” (from the Vernon MS), The prose “LYFE OF JOSEPH OF ARMATHY”, “DE SANCTO JOSEPH AB ARIMATHIA”, and The Verse “LYFE OF JOSEPH OF ARIMATHIA”

And the latter three, Skeat says, are edited in the same so as to help the reader comprehension of the first. So I concluded in my paper that the poem shows a successful representation as an old alliterative poem in medieval age of England, summerizing the whole story as follows:

“After our Lord's Entombment, by the Jews was seized Joseph of Arimathia because of his loyalty to the Lord, but he was released so blissfully that Joseph, with his wife, his son Josaphe and a company of fifty people, left Jerusalem for foreign countries to preach gospel. At first they arrived at Sarras where Joseph converted the king Evalak an un-believer who at last was baptized in the name of Mordreys, by Jesus Christ's miracles.

And Joseph abode at Sarras for a while, whilst Josephe and Seraphe (brother of the queen of Evalak) set out upon a missionary journey, the Holy Grail being left at Sarras, in the charge of two of Joseph's company.

Afterwards they were imprisoned by the king of North Wales; Mordreys, however, secured them by his mysterious power.”

Why this story of JOSEPH OF ARIMATHIE is connected with the Arthurian Legend is that, only the noblest GALAHAD of all the knights of the Round Table presided over by King Arthur, was able to really catch sight of the Holy Grail, which, it had been believed, was brought into Britain by no other than Joseph of Arimathie. That is, I found in the present alliterative poem the next lines:

Go þou most to þi wyf gete þou
most nede

A child, Galahad schal be hoten
þat goodnese schal reise

þe Auenturus of Brutayne to haunsen
and to holden.” (1230-232).